

Keywords 9.

やっぱり、「どこか狂っている」のがいい



片平 秀貴 丸の内ブランドフォーラム 代表

(かたひら ほかか) 元東京大学大学院経済学研究科教授(1989年~2004年)。「丸の内」ブランド再構築のお手伝いがきっかけで2001年丸の内ブランドフォーラム創設。「変人×変人×職商人が社会に笑顔をつくる」の信念のもと、同志とブランド育成の勉強と実践を続けている。趣味は仕事とラグビー。2010年から本誌編集委員長。

公式サイト: www.mbforum.jp facebook: "BrandForum"

私が現役の教授だった時の話ですが、年の瀬になると大学では卒論指導と修論、場合によっては博論の指導が一気にやってきて一日何万字もの研究著作に目を通さなくてはいけなくなります。おやっと思ふ秀作もごくたまにあります、ほとんどの場合、論文初心者ということもあり目を覆わんばかりの出来です。卒論の場合は締め切りが年明け一番なので、残された時間は1週間。私はそこで約半数の学生に「全面書き直し、分析直し」を命じます。皆目が血走って、顔色が真っ青になるのが手に取るように分かります。

感心するのはその学生、院生たちが3、4日の内にすっかりまともな論文に仕上げ戻ってくるのです。おそらく大晦日も三が日もなく「狂ったように」がんばったに違いありません。そこでもう1回マイナーな修正を指示すると最初のものからは想像がつかないほどの「読むに値する」論文に仕上がります。これは大学キャンパスの中のお遊びのような狂気ですが、実社会にはこれとは桁違いな狂気の沙汰が少数ではありますが見られます。私はそこからたくさん励ましと元気の素をいただいています、ここでそれを皆さんと共有してみることにしましょう。

インコース高めに外せ

自動車メーカーのマツダは2014年、2015年と2年連続で日本カー・オブ・ザ・イヤーに輝いただけ

でなく、今年3月には世界のワールド・カー・オブ・ザ・イヤーの大賞とデザイン部門のワールド・カー・オブ・ザ・イヤーの二冠を世界の自動車メーカーで初めて獲得したという快挙を成し遂げました。先日の12月21日付の日経新聞朝刊にも「危機から復活 マツダ、一点突破の凄み」という全面記事が載り、世間もその活躍ぶりには一目置き始めたようです。

マツダの幹部の方々にお聞きすると、そのきっかけはどうも2006年に当時の金井専務(現会長)が、「2015年までに世界最高のエンジンを作ろう」と狼煙を上げたところにあるようです。こう言っただけでは失礼ですが、1996年にフォード傘下に入り2001年には2000人を超える早期退職者を出したメーカーが「世界最高のエンジン」とはどうみても「どこか狂っている」としか思えません。ただこの一言がエンジニアたちを奮い立たせ、まさに一点突破で内燃機関で世界最高の効率を誇るスカイアクティブ・エンジンを完成させたのです。その立役者は世界のエンジン技術者も等しく尊敬する人見光夫常務で、その様子はNHKの「プロフェッショナル 仕事の流儀」でも紹介されました。

現在でもマツダの精神的支柱の一つに「Defy Convention (常識を打ち破れ)」があります。上述の日経新聞の記事の中でも金井会長はこう語っています。「当社は市場のど真ん中には球を投げないと

決めた。他社も投げるから。車づくりを「インコース高めに外せ」と言っている。」この普通でない姿勢がマツダの元気を支えていると言っているでしょう。

世界一のフリーホイールを作ってやる

遡ること100年。大阪の堺にもどこか狂っている人がいました。自転車部品のシマノを創業した島野庄三郎です。1921年に島野鐵工所を創設し明らかに技術的に欧米に水をあげられていた自転車のフリーホイールの生産に乗り出します。そのとき彼は「世界一のフリーホイールを作る」と宣言していたそうです。明らかにどこか狂っていたとしか思えませんね。

それからほぼ100年。全く考えられない不可能に挑戦する精神はそれ以来社員たちに引き継がれて自転車の世界に幾多の革新をもたらしてきました。米国市場に参入したとき現地の業界から見向きもされなかった現実に直面し、全米6000軒の自転車店すべてをしらみつぶしに回って実力を売り込んだのは初代から受け継いだ狂気の発現だったかもしれません。今では世界の自転車レースはシマノがいないと成立しないと言われる正真正銘の「世界のシマノ」に成長しています。

第十四代酒井田柿右衛門を唸らせた殺し文句

最後にもう一つ、どこか狂っているお話を。2013年10月に九州にかつてないラグジャリーなブランドが誕生し、世界の人々を驚かせています。JR九州が運営するクルーズトレイン「ななつ星 in 九州」です。その仕掛け人、JR九州会長の唐池恒二氏の近著『鉄客商売』（PHP研究所）によるとそれは「三泊四日の旅行代金が一人五十万円台から八十万円台と高額にもかかわらず、半年ごとに行う予約受付には、毎回申し込みが殺到、平均申し込み倍率が三十倍前後と「なかなか当選しない宝くじのような列車」といわれる」ほどの盛況だそうです。

その秘密は、ななつ星の計画を正式発表した記者会見の席に遡ります。前日に発表原稿を見た唐池氏は「日本一のクルーズトレイン」の字に目が留まり、

即座にその日本一を「世界一」に書き換えたのだといます。当日の席で「九州から世界一のクルーズトレインを誕生させる」と発表したところ大変な騒ぎになったのだそうです。それまで準備を進めていた開発陣は「世界一」の言葉に啞然とし、すべてをゼロから見直す羽目に陥ったといます。これは次号のトップインタビューで詳しく書きますのでお楽しみにしてください。この「九州から世界一」が第十四代酒井田柿右衛門を口説いて巨匠作の洗面鉢が誕生する殺し文句になり、それやこれやで今の雄姿があるというわけです。

「いかなる偉大な仕事も、狂気にならずしては・・・」

いまどの業界でも、すぐに確実に結果が出る施策を求めて理詰めで議論を進める傾向がとみに強まってきたようです。そこには皆が夢中になって熱く仕事に没頭する姿はありません。どこか狂っている人、どこか狂っている夢、どこか狂っている仕事は今ほど求められている時代はないのではと思います。

英国の広告クリエイティブの巨匠ジョン・ヘガティ卿は、“Creativity isn't an occupation, it's a pre-occupation.”（何か新しいことを考え、生み出すことは、仕事だと考えていてはできない。それは一個人として心底夢中になるところからしか生まれない）と言いました。いまゼミの学生たちと鈴木大拙著『禅と日本文化』を読んでいます、そこにも次のようなくだりがあります。

「いかなる偉大な仕事も、狂気にならずしては、すなわち、現代語で表現すれば（1938年現在：筆者註）、意識の普通の水準を破ってその下に横たわる隠れた力を開放するのだから成就されたためしはない。その力はときとして悪魔的であるかもしれぬが、超人間的であり、すばらしい働きをすることは疑えぬ。」（鈴木大拙『禅と日本文化』岩波新書）

コンプライアンスに引きずられている臆病な優等生の時代に「狂気」が密かなキーワードになることを祈ってやみません。